

# 「幸福の中に」

～ Happy と Lucky ～

ヨシュア 23:1、23:6～11、23:14

## ■ Happy と Lucky…

Happy と Lucky は大きな違いがあります。幸福とはいったい何なのでしょう？イスラエルの民はヨセフの故に大ききんから守られてエジプトに移り住んで自らの子孫を守られることになりました。けれど、そのエジプトでイスラエルの民の歩みはまただんだんズレていき、とうとうエジプトの奴隷となっていきます。神様はその姿を見てモーセを救出して行くわけですが、イスラエルの民はエジプトを出てカナンへ入るために進んで行ったのに、狭い荒野というエリアの中で40年もグルグル。ちょっと不安になればすぐに文句。目の前に祝福があつて満たされれば「神様ありがとうございます！」と言うけれど、ちょっと問題が起こるとまた文句。幸福が起きると必ず絶望が待っているのです。今まで「絶望」についてメッセージで語られてきました。なぜ絶望が起きるのかだいたいわかって来られたと思います。本来神様に自分がどう造られたかを探そうとしますが、ある失望から絶望に至ることを通して自分の本来の姿を見失ったことから自分の姿がわからなくなって、第三者から措定したり、相手から言われた言葉や環境によって「自分はこうなんだ。」と当てはめて自分自身を作り上げていくわけです。しかし、それは本当に願う自分とは違う自分なので自分自身に失望するわけです。本当の自分の中にある自分と自分でない自分がいつも複数いるのです。優しい自分と冷酷な自分。愛したい自分と愛せない自分。赦して受け入れたい自分と赦せない自分。何人かが自分の中に共存してしまい、共存する自分にまた絶望してしまう。これが絶望のプロセスでこの絶望とは私たちが死に至らすものであって、アダムとエバがなぜ神様に死ぬと言われたのかというと、この絶望が入るからだずっと聞いてきました。絶望が恋い慕ってやまない私たちの心の場所は「幸福」なのです。聖書を読んでみてください。「不安」というのはどんな時に起こりますか？確かに問題の中にいる時は不安なのです。けれど、心の深いところで自分に「大丈夫か？」と問いかけているのは祝福された時なのです。持っている時にこそ失うんじゃないかという最大の恐れがあるのです。その理由は、祝福をもってアダムとエバが罪を犯した時に最初に失ったのは神様と共にいることであり、持っているものすべてだったからです。ですから、私たちは祝福されても絶望を探して歩き、不足を探そうとしてしまうのです。「自分の人生の中でいつまた問題が起きやしないか。」「今はこんな風だけどころなくなるんじゃないか。」「そこで、私たちは「運が良くうまいければ Lucky！」という保険を作ったわけです。「運が良かったな。」「今までは運が悪かったけど今日は運が良かった。」…目の前にある Lucky を探して生きてしまっているのです。幸福が Lucky なのです。

## ■ ダビデ…

国家権力が自分に向かってきて殺そうとしている最中に詩篇 23 篇を歌ったのです。なぜかという幸せだったからです。羊を敵から守り、間違った方向へ行きそうになった時には戻すように神様はどんな時も自分を守り、敵と戦って下さることを知っていたので、Lucky ではなかったけれど幸せだったのです。ですから、幸福の中に絶望が潜むとすればそれは Lucky で生きているからです。神様は本当の意味での幸せを私たちに与えてたいのです。

## ■ ヨシュア…

カナンの地に入るのにヨルダン川が立ちほだかつて前に進めなかった時、信仰をもってそこに足を踏み出しました。すると、水は真つ二つに裂けていきました。ヨシュアはモーセを目の前に紅海が分かれるのを見ていました。イスラエルの民は紅海を目の前にした時に「エジプトにいた時の方が良かった！」と叫びました。けれど、モーセは神様に祈り、杖を紅海にかざしました。イスラエルの民は海の中にできた道を通して渡ることができたのです。ヨシュアはモーセのその姿を見、モーセの後を引き継ぎカナンへと進んでいきましたが、ほとんどのイスラエルの民は信じるのができないままカナンの地に入る前に死んでしまいました。このヨシュアが残した遺言が今日の聖書箇所です。

## ■ ソロモン…

父ダビデに従ってダビデの遺言をことごとく成し遂げていきました。ところが、晩年 700 人の妻と 300 人のそばめを持ち女性に心を傾けていく中で彼女達の言うことを聞いていくようになり、自分の神も礼拝するけれど異国の神々を礼拝していく偶像礼拝の罪を行うまでに墮落していきました。神様はとうとう怒りを発せられ、ソロモンの子ども達は殺し合うようになり、王国は北イスラエルと南ユダに分断してしまふのです。ソロモンが書いた伝道者の書で彼は「空の空」と言っています。空虚感の究極です。もし、私たちが幸福の中に目的を見出しているのだとすれば、絶えず願っているものは Lucky であつてそこには絶えず絶望が伴うのです。一つうまいければこれがうまいかなんじやないか…絶えずこの繰り返しです。けれど、神様は私たちにそのようなものを与えているのではありません。

### ① アドナイ・イルエ

#### 祝福に祝福する (バーラフ)

アブラハムは神様に約束されようやく受けた大切な息子イサクを「私のために命をとって生贄としてささげなさい。」と神様から言われてモリヤの山へイサクを連れて行きます。そして、剣をもってイサクを殺そうとした時に神様はストップをかけられ、目を上げるとそこに生贄としてささげる羊が一匹いました。アブラハムは「アドナイ・イルエ (主の山に備えあり)」と歌いました。アドナイ・イルエという言葉は「祝福に祝福する」という「バーラフ」という言葉の意味から、我が子をささげてまで神様に従った者に「祝福に祝福をあらわす！どんな状況があつても成す！」という約束に繋がる言葉として残しているのです。では、アブラハムは祝福されたいからイサクをささげたのでしょうか？そうではありません。ただ、ただ「神様に従いたい！」という願いだけだったのです。

### ② 祝福は探し続けるもの

「イルエ」という言葉は原語をみると、「ルーアー」という言葉を使っています。この言葉の意味は「見る・探す・見出す」という派生語です。「備えがある」というのはどういうことかというところ、「探す、求める」という意味です。つまり、備えというものは探すものと言っているのです。イエス様も「求めなさい。」「探しなさい。」「叩きなさい。」と言われました。それは 1 回だけではありません。「求め続け」「探し続け」「叩き続け」なさいということです。一回願って応えられなかったらすぐに諦めていいのでしょうか？それは神様を小さくしてしまうことです。主の備えを知るためには探さなければ見つからないということなのです。アブラハムも悩まなかったわけではありません。悩んで戦って信じようと思いました。「信じた」のではなく「信じようとした」のです。そして結果「アドナイ・イルエ」となつたのです。探し求めたので見つかったのです。私たちは探し求めますか？

### ③ 祝福は目的ではない！！

ヨシュアが息子の世代に約束したのは主に従い仕えることです。私たちが祝福を願うのはそれが目的ではないということです。聖書には繁栄は必ずあります。けれど、繁栄が目的なのではなく、ただただ神様に従った人がこの地にあつて繁栄したことと人々に証しになるというだけなのです。けれど、私たちがはすぐにそれを間違えて満たされることが目的となつてしまうのです。私たちの探し求めるものは幸福ではなくイエス・キリストの姿の一部になることです。「一部分」です。イエス様の好きなどころを思い浮かべて下さい。それが、私たちのなるべき姿です。それは一人一人違います。イエス様は私たちの自己中心、虚栄、比較の目、劣等感、傷…すべてをもうすでに背負つて十字架にかかつて下さり、「私の恵みは、あなたに十分である。」(Ⅱコリ 12:9)と言われています。私たちがすることはただ一つ。古い自分に死ぬだけです。決意して、あとはイエス様のようになつていこうではありませんか。幸福になることではなく、イエス様を求めていきましょう。

(要約者:全本 みどり)